



深沢 恵さん講演会

「しょういち ごくし聖一国師って どんな人」

静岡商工会議所は2016年11月24日、静岡商工会議所静岡事務所会館5階で、深沢恵さんの講演会「聖一国師ってどんな人」を開催しました。その内容の一部を紹介します。
(文責・企画広報室)

聖一国師の3つの名前

聖一国師は、お茶が静岡の産物として世に出る原点となった方です。実家は静岡市葵区栢沢の米沢家です。この大人物が静岡で知られていないのは、僧になつてから栢沢に帰ったのは、宋に渡る前と帰国して茶種を届けた時の2回だけだからです。

聖一国師は、3つの名前を持っています。1202年に生まれた時は「龍千丸」。龍のようにたくましくあれと、両親が名付けました。

5歳で天台宗の久能寺に出家した時に阿闍梨様から「円爾弁圓」という名前をいただきました。

宋から帰って3年弱を博多で過ごし、産業を育成し、疫病を鎮めました。その評判を聞いた九条道家公から京に招かれ、「聖一和尚」という名前を贈られました。

亡くなって31年目に花園天皇から「聖一国師」の号を賜りました。現在は「聖一国師円爾弁圓」という名前になります。

世の中を救ってほしいという親の願い

龍千丸を身ごもった母が安産祈願のために歩いて久能寺に着き、休んでいると、床の間の掛け軸が自分を見守っている気がしました。阿闍梨様にそれを伝えると「弁財天があなたを守っています。生まれてくる子は頭のいい子です。私のところに預けなさい」と言われました。

当時は鎌倉時代のはじまり、世の中は乱れ、戦のたびに田畑を踏みじられていました。両親は、苦勞の多い世の中を救うために、この子を高尚なお坊様にし

たら、助けられるだろうと考えるようになりました。

18歳の時、近江の園城寺へ行き、唐の書籍を読み、半年後に東大寺で受戒をして正式の僧になりました。

心から心へ伝える禅というものを知りたいと考えるようになり、上野国世良田の長楽寺へ行き、榮西禅師の弟子・榮朝の弟子になりました。鎌倉にも出向いて勉強しましたが、宋へ行って本場の禅を学びたいと考え、渡宋を許されました。

博多の港から船で宋に渡るのですが、玄界灘は荒海で気候に左右されるため、次の船を待つ2年間、円爾は、人々に禅の教えを話し、悩みを聴いて過ごしました。

宋では、径山・萬寿寺の無準禅師の教えを受けました。思うように公案がでない円爾に、師匠が揮った竹篋が右眼に当たり、これが52歳の時の失明につながりました。

宋の文明を日本に伝える

宋で6年間、禅の本流を学び、帰国した博多では、萬寿寺で修行して先に帰国した同僚が2つの寺を建てて待っていました。船主の謝国明も円爾に感銘し、博多に承天寺を建てました。寺を初めて開いて仏事をするお坊様を開山といいます。円爾は、筑前肥前博多の3つの寺の開山になりました。

円爾は、人々に宋の食物をふるまいました。宋の修行僧たちは朝、お経を唱えながら家々をまわる托鉢でいただいた食物などを材料に、食事を作っていました。その中に羊の肉の入った肉饅頭やスープがありました。円爾は、羊の代わり

に小豆を使った饅頭を作りました。スープにも小豆を使い、葛の葉などを使って固めて羊羹を作りました。蕎麦の粉を麵にして蕎麦を作りました。寧波の碧山寺で使っている一度にたくさん粉を挽く機械を密かに写生した水磨之図を持ち帰りました。

悩める人の心に安らぎを

道家公から京に招かれた後、鎌倉から建長寺の開山を頼まれました。鎌倉は、京を追われた榮西禅師を受け入れた地で、禅宗の教えは明日をも知らぬ命を生きる武士たちに受け入れられたのです。

その頃「死んでから極楽浄土へ行くのではなく、生きているうちに南無妙法蓮華経と唱えて、その功德をたのまん」と論争を挑んだ日蓮に対して、「飢えた時、食の名を唱えても満腹にはならない。しかし、あなたの悩める人の心に安らぎを与えようとする理念は、私の本願といささかも異ならない。私たち仏教徒は、世に光明となるために、人々に差別なく光を差し延べん」と聖一和尚は答えました。その後、日蓮が辻説法で浄財を貯めて送った大きな柱を、聖一和尚は京の東福寺の仏殿に使わせました。

母のもとに茶種を持ち込んだのは帰国3年後の1244年、43歳の時。竹筒の節の間に隠して運んできた茶種を、まず足久保で自ら蒔き、栢沢で母に渡し、「栢沢の地は薬科川の水のおかげで霧が出て径山・萬寿寺の気候に似ています。良いお茶が育つはずですから、お茶を飲んで長生きしてください」と伝えたそうです。